

2019年度 緊急助成

琉球列島における希少カメ類の密猟防止対策としての 普及啓発活動

琉球列島希少カメ類密猟に関するシンポジウム実行委員会
伊澤雅子¹・傳田哲郎¹・玉城 歩¹・小林 峻²

キーワード：違法採集，セマルハコガメ，台湾，密輸，リュウキュウヤマガメ

1. 背景

台湾ではタイワンセマルハコガメ *Cuora flavomarginata flavomarginata* の違法捕獲，さらにその海外への密輸出が毎年膨大な数となっており，大きな問題として取り上げられて来た。実際に摘発された事例も多く，保護されたカメは数千頭のオーダーである。その際に，沖縄からの持ち出しもあるということは台湾の研究者からは指摘されていたが，「噂」の域を出なかった。しかし，2018年10月，沖縄島北部やんばる地域で違法捕獲したリュウキュウヤマガメ *Geoemyda japonica* 60個体を香港に持ち込もうとした日本人が香港当局によって摘発され，逮捕された。その後2019年5月に実刑判決を受けている。この事件によってこれまでの噂が顕在化したことになる。その後，関係機関の情報蒐集と緊急対応によって，宅急便や郵便のチェック，空港でのチェックなど輸送に関わる対策が開始された。

輸送経路の他に，我々が最大のポイントの一つであると考えるのは，地元に関係者がいなくては多くの個体を短期間で集めることはできな

いということである。その場合に，協力者が悪意を持って協力しているのではなく，騙されて善意を利用されているケースもあると考える。そのような状況を止め，密猟を減らすには，まず多くの関係者や一般の方たちに，現在起きていること，その危険性を知らせることが急務であると考えた。

琉球諸島において密猟が懸念されるカメ類は沖縄島やんばる地域に分布する上記のリュウキュウヤマガメと，台湾で密猟が問題となっているタイワンセマルハコガメの同種別亜種であり，八重山諸島に分布するヤエヤマセマルハコガメ *C.f. evelynae* である。この2種は国の天然記念物に指定されている。現在，それぞれの生息地は世界自然遺産の候補となっている。これからさらに海外からの観光客は増えることとなる。沖縄島の場合には大型客船も頻繁に来島しており，船での持ち出しはチェック機構がない。一刻も早く地域への情報提供が必要であることから本課題をテーマとした2回のシンポジウムを企画した。

第1回のシンポジウムは2019年5月25日に

1: 琉球大学理学部 2: 琉球大学大学院理工学研究科
2019. 7. 29 受付 2020. 9. 29 公開

名護市名桜大学で開催された沖縄生物学会の一般公開シンポジウム「沖縄の自然が盗まれる！」として実施した。第1回はカメ類に限定せず、昆虫も含めた違法採集を取り上げた。170名の参加があり、関心の高さが伺われた。

II. シンポジウムの実施

第2回のシンポジウムを2019年6月22日に沖縄県立図書館ホールで実施した。議論の対象をカメ類に限定し、タイトルは「亜熱帯の島々のカメたちは生き残れるのか？～沖縄・台湾における爬虫類の密猟・密輸の現状と影響」とした。演者と演題は以下の3題とした。陳氏の講演には通訳をつけた。

(1) 太田英利（兵庫県立大学自然環境科学研究所／兵庫県立人と自然の博物館）

「琉球の陸の動物たちの歴史」

(2) 陳 添喜（台湾國立屏東科技大學）

「Tragedy of the freshwater turtles in Taiwan: Poaching, trafficking and unclear policies（台湾における淡水性カメ類の悲劇：密猟、違法取引及び不明確な政策）」

(3) 東岡礼治（環境省沖縄奄美自然環境事務所）

「沖縄奄美地域における密猟・密輸出の現状と対策」

太田氏は琉球諸島の両生爬虫類を中心とした生物地理学的特徴と保全に関わる問題について解説した。琉球諸島が生物の進化、多様化のホットスポットであると同時に、我々の知る以上のものがすでに絶滅して来たということを指摘した。陳氏はこれまで長く台湾におけるカメ類の密猟対策に取り組んでこられた研究者であり、台湾の現状と密猟が中国のマネーゲームと深く関わっており、巨額の資金、様々な国を介した複雑なルート、大小の組織があることを報告した（図1）。それは日本ではほとんど知られて



図1 台湾國立屏東科技大學 陳添喜博士による台湾のカメ類密猟に関する講演

いなかった情報であった。また、飼育下においてハイブリッドが作られている状況や密猟の現場の衝撃的な動画なども紹介された。東岡氏は密猟、密輸出に関する法律、現行の対策、見つけた場合の対応などについての解説を行った。また、同時に会場でNTTドコモによる希少カメ類を識別するアプリの紹介と実演が行われた（図2）。これは密輸出摘発のために税関や輸送機関など使われることを想定して開発されたものである。

会場には65名の参加があった（図3）。フロアとの質疑に当たっては、監視の目を強化すべきであること、警察をはじめ関係期間との協力が必要であること、普及啓発の必要性、監視の



図2 NTTドコモによる希少カメ類を識別するアプリの紹介



図3 シンポジウム会場



図5 リュウキュウヤマガメの生息地の視察

強化によって起こる問題点などが指摘された。

III. 現地視察

翌23日にはシンポジウム演者、研究者、行政機関等の参加の下、現地視察を行った。やんばる野生生物保護センターにおいて地元でのパトロール体制などについての意見交換を行った(図4)。その後、やんばる地域のリュウキュウヤマガメの生息地の視察を実施した(図5)。非常に天候が悪かったため予定のコースを回ることではできなかったが、道路沿いの探索を行った。

その後、沖縄こどもの国動物園を訪問した。同園では違法採集から押収されて元の生息地に戻せなかったカメ類が保護・飼育されている(図



図6 沖縄こどもの国に飼育されている保護個体

6)。また、野外で発見された雑種のカメ類も捕獲・飼育されている。どちらもかなり多数のぼり、沖縄の現状がかなり悪い状況であることを認識するとともに、対策について意見交換を行った。



図4 やんばる野生生物保護センターにおける意見交換

IV. 今後の課題

今回のシンポジウムで、台湾で起こって来たことが沖縄でも起こり始めていること、すでに対策が急を要していることが認識された。また、どちらのシンポジウムにおいても「監視の目」が重要であることが参加者の間での共通認識となった。その点は当初の目的をある程度達成できたと考えている。

今後さらに情報の発信が必要である。特に野

外活動を行う機会の多い，研究者，自然観察者，ツアーガイド，大学生等には様々な機会を利用して情報を伝えることが必要である。また，今回は沖縄島内で実施したが，石垣島，西表島においても同様の取り組みが必要であると考え

2019 Urgent Grant Programme

Educational program as prevention measures of poaching of endangered turtles in the Ryukyu Archipelago

IZAWA Masako, DENDA Tetsuo, TAMASHIRO Ayumu
and KOBAYASHI Shun

Keywords: *Geoemyda japonica*, *Cuora flavomarginata*, Taiwan, illegal hunting, smuggling